



卷 頭 言

農 業 と 水

財団法人 日本植物調節剤研究協会 専務理事 小澤 啓男

かつて、水について二度ほど書かせて頂いたがもう一度取り上げさせて頂く。

地球は「水の惑星」といわれ、水によって生物が生存している。ところが、殆どの作物や我々に必要な河川、湖の淡水は地球に存在する総量の一万分の一にも満たないという。最近、世界銀行は世界人口の四割は日常生活の水確保に苦しんでいると伝え、これから先、適切な水管理が行われなければ多数の国で、水不足が深刻化するだろうと警告している。

水の不足は農業を直撃する。農民は昔からいやというほど水の重要性を知っている。水源を河川に求め、歴史的展開の中で、湛水状態での水稻栽培技術を作り上げ、維持してきた。しかしながら一般的にはどうだろうか。空気とか、水はタダであるとの意識が未だ残っているのではなかろうか。無くなってはじめてその価値を知ったのでは晩すぎるのである。

海に囲まれ、雨も多く、水には何不自由ないように見えてその実、わが国の地形は急峻なため、せっかくの雨水もそのまま海に流出してしまう。これを受け止めているのは森林であり水田である。森林の水源をかん養する能力や、水田の持つダム機能の認識し、評価して活かすことが水資源の確保、維持につながるものと思う。

ところで、話を水稻栽培における「水」に移そう。かつて、水稻作は俗に八十八種の農作業で成り立つと言われ、相当きつい作業も多かったが、農業の開発や機械化によってかなり楽に

なった。とくに、除草剤の発展は、四つんばいの重労働から完全に解放した。これからの水田除草剤は更に、簡便なものになる。ジャンボ剤しかり、フロアブル剤しかり。それらの所定量を水田内に入れてやれば、後は水が成分を拡げてくれる。これらは水の助けを借りて効果が安定するのである。とくに、ジャンボ剤は数個を手軽に投げ込むだけで良く、究極の除草剤の感すらする。このように、除草剤にとって水は大事なパートナーである。使用者は良きパートナーシップを維持させるべく努めねばならない。

水田の漏水の九割近くは「あぜ」から起こるといわれている。古く、灌漑設備の十分でない頃、少ない用水や、金肥と称した肥料を無駄にすまいと懸念に水を漏らさないように、「田を作るよりもあぜを作れ」とまで言われた。その気持ちだけは、いつまでも持ち続けて欲しい。

今、農業は危機的状況にあるという。しかし農民は農業をいつも苦労の中で支えてきたと思う。高齢者化、後継者不足とか聞き飽きるほど言われているが、高齢者は経験豊富な人達であり、後継者は若い意欲のあるこれからの人達である。この人達がかつて、いろいろな話題を語り合った囲炉裏文化時代にまで戻れないにしても、より連帯感の持てる農村を作り、地域の活性化が果たせるように、政に係る人達が中心になって、考えなければいけない時期と思う。

農村が在るから農業があり、農業があるから緑がある。

そしてその豊かな緑が「水」を護る。